

## 原始仏教に於ける經濟倫理について

—特に財を中心として—

### 荻原明彦

原始仏教に於ける經濟倫理を考察する場合二様の立場がみられる。まず、前者は、僧伽の立場から考えた場合であり、後者は、一般在俗者の立場から考えた場合である。然るに、ここでは特に一般在俗者に対する經濟倫理を対象として吟味を試みることにとどめたい。

まず、原始仏教に經濟倫理と呼ばれるものがあつたかどうかということが問題である。何故なら、仏陀は世俗的な經濟問題に関するものは才二義的なものとして取り扱かつていると考えられるからである。また、經濟財は解脱のための修道の目的に対する手段としての価値としてしか認められなかつた。然るに、普遍的、実践的な仏教に於いては、何らかの形で經濟問題に関する倫理的評價、或いは、反省が述べられているはずである。そこで

小論では、原始仏教聖典の中から經濟財を中心に説かれている道徳ないし倫理と思われるものについて論述を試みることにとどめたい。

仏陀在世當時の印度に於ける一般世俗の間では多く享樂の思想が横行していた。仏陀は、そのような享樂、頽廢した生活を極力排斥されて、禁欲的な日常生活を送ることを説かれていた。

仏陀は、人間の欲望ないし欲求というものが、一般に「渴望」と呼ばれているように、強い力をもつたものであるかを知りすぎるほど、知つていた。そこで、つとめて欲望ないし欲求を制し排撃する態度をとつた。欲望ないし欲求を制することは、經濟生活の重要性を過小評價したり、經濟活動の進展を輕蔑するのではなかつた。仏陀が賞讃したのは、「少欲で足ることを知る」生活であつた。また、財の意義を重んずるが故に、自分の欲望ないし欲求にかられ不当に財を浪費することを戒めたのである。財は感謝して消費し、愛惜して使用すべきであるとするのが、消費に関する原始仏教の精神であつたと考

えられる。

仏教は、經濟財は解脱のための修道という目的に対する手段としての価値しか認めず、また、賤財思想の傾向が強いと思われていたが、それは僧伽に対して説かれていたものであつて、一般在俗者に対してはむしろ積極的<sup>に</sup>財の集積を説いている。そして在俗者は、まず、自己の職業に精勵すべきであるとしている。雜阿含經・四には「種々工巧業處。以自營生。謂。種田、商売、或以書疏算畫。於彼彼工巧業處。精勤修行」(大正・二・二三・中)と説き、それが結果として營利を追求すること、いいかえれば、積極的な財の集積になるとされている。

財の集積をはかる場合に最も警戒を要するものは消費である。そこで具体的な精神態度として放逸ならぬように種々のいましめを説いている。長阿含經・十一「善生經」には「六損財業者、一者耽湎於酒二者博戲、三者放蕩、四者迷於伎樂、五者惡友相得、六者懈墮 是為六損財業」(大正・一・七〇・中)と説き、そのいましめは六因を数えることが出来るとしている。その中で特に

飲酒を堅く禁じたことは、原始仏教の世俗的道德の特徴である。

尚、仏陀は一層広い意味に於ける財の消費の原因として八種を挙げてゐる。即ち、それは、王難、賊難、水難、火難、自然消耗、貸倒れ、怨家の破壊、惡子の浪費等であり、富財が必ずしもたのみとならないことをあげてゐると同時に、經濟上の管理の注意とせられている。

仏陀が種々のいましめを通じて財の集積を説かれてゐることは、在俗者にはそれは非常な禁欲的なものにみられる。しかしながら、仏陀はあまり節約を旨とした極端な耐乏生活を強要してゐるのではなかつた。雜阿含經、四には「所有錢財。出内称量。周円掌護。不令多入少出也多出少入也。如執秤者。少則増之多則減之。知平而捨。如是善男子。称量財物。等入等出。莫令入多出少出多入少。若善男子。無有錢財。而広散用。以此生活。人皆名為優曇鉢華。無有種子。愚癡貪欲。不顧其後。或有善男子。財物豐多。不能食用。傍人皆言。是愚癡人。

如「餓死狗」。是故善男子。所有錢財。皆自称量。等入等出。」（大正・二・二三中）と説いて、收支に相応した、いいかえれば、収入と支出との均衡のとれた中道の生活を高唱せられている。

財の合理的な運用法は、仏陀によれば收支を計つて、よけい支出せぬことであつたが、その具体的なものとして、長阿含經・十一、「善生經」には「分別作四分。一分作飲食。一分作田業。一分奉藏置。急時赴所須。耕作商人給。一分出息利」（大正・一・七二中）と説いている。これは、仏陀が家庭經濟の原則として教えられたものであらう。

尚、ここで注意すべきことは、原始仏教に息利を生む投下資本の思想が存在していたかどうかということである。漢訳經典では前述のようになつてゐるが、南伝大藏經にはそのようになつてゐないからである。このことについては、既に多くの学者達が、指摘と説明を試みてゐるが、私としては、息利を生む投下資本の思想が印度一般の思想として支配してゐたと考えられ、それを仏陀は

用いられたに過ぎないのではないかと解するのである。原始仏教に於いては、營利の追求を積極的にするため、少なくとも世俗人に対しては、財を輕視することは説かず財を重視された。家庭を健全に維持するためには、經濟的な基礎の財力というものが必要であり、家庭經濟に關連してこの方面の注意を説かれたのも当然ではなからうか。

以上、財を中心にして在俗者の道德ないし倫理を簡単に述べてみたが、仏陀が常に説いておられることは、財は正法によつて追求されるものであり、それによつて現世に於いては自他ともに幸福を得、來世に於いては施与することによつて天国に生まれ果報を得るとしてゐる。

仏陀は財を尊重しながらも、それに対する執著を離れることを説いている。執著を離れるということは、具體的には施与するという形で現わされてゐる。財は究極に於いてやはり宗教的な目的を達成するための手段であつたと考えられる。